

Title

電話と拍手——フレデリック・ワイズマン『ボストン市庁舎』 に見る受け取りの構造

Name

伊藤亜紗

「ラグランジ通りの交差点で信号が消えている」

「うちのキッチンの床下にネズミが住んでいるようだ」

「補修が必要な道路があるんだけど」

「伸びすぎた木の枝を切ってほしい！」

ここは米国マサチューセッツ州ボストン。市庁舎のなかのコールセンターだ。このまちには「3 1 1」と呼ばれるホットラインがある。緊急性がそれほど高くない問題について、市民が市に相談・通報するための回線である（火事や盗難のような差し迫った問題については「9 1 1」にコール）。相談の内容は、インフラの補修に関するものから個人的なトラブルまで実にさまざま。センターには10名ほどのスタッフがいてひっきりなしに対応しており、受けた電話の内容が壁のモニターにリストアップされるようになっている。

電話が鳴り、受話器をとる。相手が話し始め、その声が聞こえてくる。周知のとおり、最初のコミュニケーション理論は、電話を想定して作られた。ベル研究所に勤めていたクロード・シャノンが1948年の論文「コミュニケーションの数学的理論」で発表した、いわゆる「シャノンモデル」である。別の言い方をすれば、電話が出現するまで、人々はコミュニケーションの理論を必要としなかった。シャノンのモデルがまさにそうであるように、発信者と受信者が物理的に切り離されていて、それらがノイズをはらみながら接続されるという経験が、コミュニケーションの理論を生んだのである。「つながる」という感覚は、「切断」を前提にしている。

しかし、「つながる」は必ずしも「受け取られる」を保証しない。「つながる」はあくまで通信の技術的な問題だが、「受け取られる」は自分のメッセージが相手に理解され、相手のうちに具体的な行動や認識の変化を起こすという倫理的な問題を含んでいるからだ。にもかかわらず、両者はしばしば混同される。「つながっている」だけなのに「受け取ったことにする」ことができってしまう。通信の技術が可能にしたのは、「受け取ったふり」であるとさえ言うことができるかもしれない。「つながる」は「受け取られる」の必要条件でしかないのに、すり替えられてしまうのだ。

コールセンターという機能を、「つながる点」ではなく「受け取られる場」にすること。ドキュメンタリー映画の巨匠フレデリック・ワイズマンが、最新作『ボストン市庁舎』（2020）において描いたのは、まさにこの「受け取り」を起点とした行政のあり方である。全編274分の長編は、ナレーションもインタビューもなく、実際に行われた会議や住民集会、町の様子などを淡々とつなぐ形で進行するが、その冒頭はコールセンターのシーンから始まり、ラストもまたコールセンターの声で終わる。電話で始まり、電話で終わる映画なのだ。

市の警察長官、ホームレス問題を担当する職員、全米黒人地位向上協会の会長、大麻ショップの申請者、ゴミ収

集にたずさわる労働者、そして住民。映画にはさまざまな人物が登場するが、その中心にいるのは市長のマーティン・ウォルシュである。高齢者の集まるパーティーやフードバンクに出かけていっては、ウォルシュは人々にこう声をかける。「人を助けるのが私の仕事です。私に助けを求めてください。私に電話をしてください」。もちろん実際に電話をとるのはコールセンターのスタッフだ。しかし、少なくともこれを聞いて311に助けを求める人は、「ボストン市」のような抽象的な存在ではなく、「市長に」かけるつもりで電話をしているはずである。

コールセンターが興味深いのは、それが企業のものであれ、地方公共団体のものであれ、「法人」や「市」といった法律上の抽象的な人格が、「声」という生身の身体の出発点と結びつく点である。「はい、ボストン市311です…」そう答える電話越しの声が、単なるオペレーターの声ではなく、市長ウォルシュの声でもあり、つまりはボストン市の声でもあると信じられること。そして同時にまたその「ボストン市の声」が、マニュアルに従って機械的に返答する声ではなく、こちらの介入によって変化する可能性を含んだ、倫理的な主体の声であると信じられること。抽象的でありながら生々しいこの「声の二重性」なくしては、人は電話の相手に助けを求めることなどできない。(余談だが、こうしたコールセンターの可能性を最大限に活用した試みのひとつが、「Jアート・コールセンター」だろう。Jアート・コールセンターとは、2019年のあいちトリエンナーレにおいて組織的な抗議の電話(電凸)が事務局に寄せられたことを受けて、演出家の高山明が仲間とともに立ち上げた合同会社にして演劇作品である。その著書『テアトロン』(河出書房新社、2021)で高山が語っているところによれば、複数の電話に複数の人がランダムに対応するコールセンターという空間においては、人々のふるまいは自ずと演劇的な二重性をもつことになるという。なぜなら、自分が電話の相手に向かって語っているときにも、必ずその内容を聞いている別のオペレーターという「観客」がとなり存在するからである。高山によれば、この「役を演じている」という感覚、まさに二重性の感覚が、抗議者にも、対応する高山たちにも、「自分の感情からいったん距離をとり、別の視点に立つ可能性」を作り出していたと言う。)

とはいえ、声の二重性は、あくまでコールセンターの「受け取り機能」の入り口にすぎない。言うまでもなく、「受け取り」の真価が問われるのは、電話を切ったあと、つまりつながっていないときに、それがどう受け取られているかである。「私がこの前伝えた話はどうなりましたか」。高齢者の集まりで、あるお婆さんがウォルシュに尋ねる。ウォルシュは、どうなったかトラッキングしてきちんと報告させるから待って欲しい、と伝える。制度に穴があると分かれば、その穴をきちんと埋める。不平等がそこにあるなら、それが解消されるようにたとえば雇用を作り出す。「市がやっていることを市民に伝えられていない」とウォルシュが繰り返すのは、電話を切ったあとの「その後のケア」こそが受け取りの証明であり、基盤であるからだ。

「その後のケア」への意識は、この映画の随所に描かれている。たとえば退役軍人たちの集会のシーン。イラクやベトナムの帰還兵たちが順番に壇上に立ち、自分や知人の経験を語るのだが、その内容のほとんどは帰国後の生活に関するものである。従軍の本当に苦しみは、戦場ではなく帰国した後に始まるのだ。戦地で変わってしまった自分と、日常を送っていた家族とのあいだにできた埋めようのない溝。ある青年は、自分が従軍から帰って初めて、近所の老人がなぜ気難しかったのかを理解する。青年がライフルを持って老人のもとを訪れると、老人は生き返ったように沖縄戦のことを語り始める…。

日常とは、終わりなき「その後のケア」そのものである。この認識は、ウォルシュ自身の経験にもとづいている。ウォルシュは、貧困率が高いドーチェスター地区の労働者家庭の出で、7歳で癌の闘病を経験し、その後アルコール依存症を発症している。特に、退役軍人たちの話に呼応するようにしてウォルシュが語ったアルコール依存症の経験は、映画の中でも強い印象を残す。ウォルシュは、自分はまだアルコール依存症を克服したわけではない、と言う。ただ、飲まないでいられる日がずっと続いているだけなのだ、と。端からみればすでにそこに危機はないよ

うに見える時間も、本人は「その後」を生きている。

アルコール依存症で苦しんでいたとき、ウォルシュはAA（Alcoholics Anonymous）のミーティングに参加していたと言う。AAとは、アルコールとのつきあいに問題を抱える当事者たちが、仲間とのミーティングを通じて、アルコールを飲まない生き方を続けることを目指す自助グループのこと。ミーティングでは自己紹介をしなくてもよく、人々は名前を捨てる（Anonymous）ことができる。そして、進行の原則は「言いつばなし聞きつばなし」である。つまり、人々が語るさまざまな話に対して、誰も解釈を与えたり、批判したりしてはならないのだ。

「言いつばなし聞きつばなし」は、決して受け取りの拒否ではない。そこにいる無名の人たちが、静かに、それぞれの仕方、話された言葉に意味を与える。空中に放たれた言葉が、染みこむように、ひとりひとりの中に入っていく。「言いつばなし聞きつばなし」は、その場を一元的な意味に回収しないことによって、受け取られる瞬間をどこまでも引き延ばす。そして、そうすることによって、話をした人にも、それを聞いた人にも、「その後の日常」を生きる力を与える。「言いつばなし聞きつばなし」は、深い受け取りの作法である。

ふと思えば、この映画にはほとんど拍手のシーンがないことに気づく。ウォルシュや他の人物が人前でスピーチを行う場面など、拍手が起ころうようなシーンはたくさんある。にもかかわらず、スピーチのあとの拍手は、編集によって巧妙にカットされているのである。スピーチのあいだ、画面に映し出されるのはせいぜい、スピーカーの話にじっと耳を傾け、聞き入る人々の表情のみである。拍手が大々的に描かれるのは、ウォルシュの演説にコンサートホールいっぱいの人々が立ち上がって拍手するラストまぎわのシーンだけ。それまでは、どんな優れたスピーチも、まるでAAのように「言いつばなし聞きつばなし」にされるのだ。

拍手は出来事を完結させ、人々を祝祭的な一体感のなかに溶かし込む力をもつ。しかしワイズマンが描こうとしたのは、そしてウォルシュが大切にしていたのは、いつまでも完結しない日常を生きる、バラバラな個人たちの物語である。それらはバラバラであるからこそシンクロし、互いを照らしあうことができる。コールセンターから始まった受け取りの連鎖が、いつまでも完結することなく、人々のあいだで起ころ続けること。それが行政の仕事であり、民主主義であることを、この映画は教えてくれる。